

天国の福音書 序文

救世教とは何ぞや

この文を書くに当って、前以て断っておきたい事は、我が救世教は純然たる宗教ではないのである。と言つても、一部には宗教も含まれてはいるが、全部でない事は勿論である。では、何故救世教の名を附けたかという、何しろ有史以来夢想だもしなかつた処の劃期的救いの業である以上、止むを得ずそう附けたまでであつて、特殊の名前を附けるよりも、この方が分り易く親しみ易いからで、これを率直に言つて宗教以上の宗教、即ち超宗教であり、空前の救いの業と思えばいいのである。

そこで先ず大体の輪郭を書いてみるが、抑々この世界は人類が原始時代から現在に到るまでの長い間、幾多の卓越せる有能者が現われ、力の限り遠大なる理想の下に苦心努力した事によつて、今日見るが如き絢爛たる文明世界が出来上つたのであるから、人間はその恩恵に対し、大いに感謝感激が湧くべきに拘らず、事實はそうでないとしたら、実に不思議と言つてよからう。併しよく考えてみると、何よりも肝腎な幸福がそれに伴なわないからである。その原因は言うまでもなく現在文明のどこかに一大欠陥があるからであつて、私はその欠陥を神から知らされたのである。それは何かというと現代文明は全面的進歩ではなく、片面である唯物分野のみの進歩であり、他の半面である唯心分

野は全然顧みられなかつた事である。併しこれにも理由がないわけではない。即ち神の経綸上、物質文化を發達させる為には、或期間唯心文化の發達を阻止しなければならぬからである。それによつて物質文化は予定の線にまで發達した今日、ここに神は唯心文化を一挙に飛躍させ、兩々相俟つて眞の文明世界を創造されんとするのである。そうしてその使命の下に生まれたのが我が救世教であるから、既成宗教とは凡てに涉つ比べものにならない程の相違があるのである。

以上の如くであるから、根本としては長い間眠つていた有神思想を呼び覺ますことであつて、これが容易ではない。何しろ文化民族の大半は科学に魂を奪われ、神を無視

して来た今日、この魂を揺り動かすとしたら、実に驚異的超人力によらねばならないからで、これによって神の實在は確認されるのである。その方法としては奇蹟より外はないので、本教に奇蹟の多いのもその為である。勿論この力こそ主神から伝達される絶対力であるから、如何なる無神主義者と雖も、有神思想に転向するのは勿論であって、ここに精神文化興隆時代に入るのである。その結果、跛行的文化は是正され、真の文明世界実現と共に、人類の最大苦悩である病氣、貧乏、争いの三大災厄は根本的に解決されるのであって、その為選ばれたのが私であって、このことは今改めて言うのではない、昔から幾多の聖者賢哲が予言された処であり、只その時期が到来したまでである。彼の

キリストの天国は近づけり、釈尊の弥勒下生、天理教教祖の甘露台の世、大本教教祖の松の世、日蓮の義農の世、猶太（ユダヤ）教の救世主降臨等々もそれであつて、これに就いての注目すべき一事がある。それは右は全部予言であつて、実現性はない事である。然るに私はこの地上天国を現実に樹立するのであるから、その実行者であり、各聖者の予言の裏附者でもある。という、その言の余りの誇大なるに驚歎するであろうが、この言を發する私としては、いかに確信に満ちているかが窺われるであろう。それというのも、主神は私に対して目的達成に必要な凡ゆる智慧と能力を附与せられ、然も超人的神力をも授け給うたのである。そうしてこの神力なるものは人類の経験上未だ嘗てな

かったものであるから、到底想像は不可能である。現在私はこの力を自由自在に行使し、無数の奇蹟を現わしている。故に一度本教信者となるや、如何なる人でも直ちにこの福音に浴す事が出来るのである。

即ち病める者は医され、貧なる者は裕かに、争いは霧消し、不幸は幸福に転化する等々、神の恩恵の如何に深遠なるかに感激するのである。そうして個人の集合体が、社会であり、国家であり、世界であるとしたら、本教発展に従いここに平和幸福なる地上天国は実現するのであって、かくして神の御目的は達成せられるのである。その境目が現在であるから、先ずこの事を知り、幸福を掴む事こそ光栄の至りである。

故にこの著は、宗教始め凡ゆる事象の真髓を、神智を通じての解説書であつて、今まで書いた多くの中から、私の指示のまま弟子に選ばせ、編纂したものであるから、実に空前絶後の真理の解明であり、寸豪の誤りはないのである。それと共に、今後も続々出るので、溜った都度刊行する予定である。即ちこれこそ救世教の聖書であり、将来世界の宝典として子々孫々に伝えらるべきものであらう。

（天福 昭和二十九年八月二十五日）